

青梅市文化財ニュース

第248号

平成20年6月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859）

青梅市内にある遺跡の現状 その4

文化財ニュース第218号と第228号では青梅市内を流れる多摩川上流域から中流域の遺跡、そして、238号では下流域の右岸にある遺跡についてご案内をしてきました。今回はその第四回目、多摩川下流域の左岸における遺跡についてご案内いたします。

青梅市街から東へ広がる台地は北側を流れる霞川と南側を流れる多摩川により扇状地の形となって台地が形成されました。その台地に対し多摩川の浸食と、隆起により数段の河岸段丘を形成しました。その規模は高いところで10m以上にも及ぶものもあります。そのような段丘上には数多くの遺跡が残されています。

今回は青梅駅から東へ広がる台地上あるいは段丘上にある十数か所の遺跡をご紹介しますことに致します。

多摩川沿いに位置する千ヶ瀬地区には8か所の縄文時代の遺跡が確認されています。その中の2か所が重要な遺跡となっています。

その1つは、名称は特に付けられていませんが、図中①の遺跡で、市立郷土博物館の位置する多摩川対岸、琴河原と呼ばれている千ヶ瀬町六丁目917番地付近にある遺跡です。大正2年3月、電柱の設置工事を行なった際、長さ159cm、最大径16cm、重さ61kgの石棒が発見された事により遺跡の存在が確認されました。その際、緑泥片岩で作られた、長さ93cm、最大径18cmの石棒も発見されましたが、石質がもろかった為に取り出す事ができなかったといわれています。この遺跡では、縄文時代後期前半土器片や土師器片が採集されており、石棒は東京大学から借用し郷土博物館で展示されています。

千ヶ瀬地区でもう1か所重要な遺跡に千ヶ瀬遺跡があります（図中②）。青梅市立第二中学校南方、千ヶ瀬二丁目166番地に位置し、昭和53年7月、下水道工事に伴う土器片の発見により遺跡の存在が明らかとなりました。

緊急発掘調査が行なわれ、竪穴式住居跡1軒と、その竪穴を埋め尽くすように投棄された膨大な量の土器類が見つかりました。この土器類の投棄状況は時代の新旧を語るに限らず、文様の変化が語る時代の流れを把握することのできる重要な発見となりました。土器の破片から20体ほどの固体に復元した結果、時代としては縄文時代中期前半阿玉台型式の物と、勝坂型式に入る直前の時期の土器であることが判明致しました。

復元された土器は、人体文や蛇体文と呼ばれる文様が器面に表現され、拓本による展開図でその不思議なデザインに注目されています。

このほか、千ヶ瀬地区では宗建寺の墓地西側一帯に位置する縄文時代後期後半の加曾利B式の土器や安行式系の土器が採集された遺跡（図中③）。千ヶ瀬一丁目6番地付近に位置するお伊勢山遺跡（図中④）などがあります。

（裏面に続く）

西分地区では2か所の遺跡（図中⑤、⑥）があり、⑥の作馬街道遺跡についてふれてみることに致します。この遺跡は、旧農林高校西側にある農場内に位置し、縄文時代前期に属する土器が採集されています。

この土器は、粘土内に植物などの繊維を混ぜて練り器に仕上げたもので、縄文時代の前期に見られる特徴のひとつです。又、器面に付けられた縄文についても特徴があり、縄を再度撚り、それを再び撚った物を器面に転がして付けたもので、複節縄文とか異条縄文などと呼ばれています。この遺跡は縄文時代前期前半の、市内でも数少ない遺跡のひとつとなっています。

J R 青梅線の北側、勝沼地区では図中⑦の西分神社、図中⑧の 旧都立青年の家 敷地、図中⑨の乗願寺墓地域において縄文時代早期前半の土器や前期前半の土器が採集されました。このほか、時代の新しい遺構として河辺地区では古墳群と焼物の窯跡を上げることができます。図中⑩は青梅市内で唯一、多摩川上流域に位置する古墳群があったとされている所です。河辺町三丁目 1105～1106 番地付近に位置し、耕地拡大のため、明治時代に発掘されたもので、調査後は整地されてしまったことにより正確な場所は不明となっています。定本市史青梅では、3基の古墳が発掘され、そのうちの2基から直刀が、一基からは須恵器のような壺が見つかったと記されています。

また、近世の遺跡では、河辺町一丁目 900 番地に位置するところに河辺焼と呼ばれる窯跡（図中⑪）があります。昭和53年に発掘調査が行なわれ、2基の窯跡を始め、陶器片や窯の道具が発見されました。時代としては天明から寛政（1781～1801）にかけての頃のものとは推定されています。

以上、多摩川全域における遺跡の現状を4回に分けてご紹介いたしました。宅地化により、現在ではほとんど表面採集による遺物の採集は不可能となっています。しかし現在まで、私たちは地中に眠っていた生活の状況をそのままの姿で掘り起こし、残された道具や遺構により無言の生活の場を解明して参りました。これからも青梅市の歴史を一步一步解明するため、多くの遺物、遺構との新たな対話ができることを望むものです。（続く）

（文責 鈴木 晴也）

